



“カナダの政界は 墮落している”

ヨーク大学教授 ジョン・セイウェル

カナダの二代目首相アレクサンダー・マッケンジー。もし彼の名前がもう少し違っていたら、国民の記憶にもっと強く刻まれていたかもしれない。カナダ史にはアレクサンダーやマッケンジーがわんさといふ。カナダを初めて横断した探検家も同姓同名のアレクサンダー・マッケンジー。トロントの初代市長で反乱を起こしたのは、ウィリアム・ライアン・マッケンジー。そしてマッケンジー・キングといえは十七年間も首相の座にあって、数々の偉業を成し遂げた自由党の大立物だ。しかし、鉄道汚職事件の政治的混乱と経済不況の時代を引き受けたアレクサンダー・マッケンジーは、本来ならもっと評価されていい存在である。

石屋から政治家へ

マッケンジーは一八二二年、スコットランドの貧しい家に生まれた。十代で石屋に奉公に出たが、二十歳のとき恋人と一緒にカナダへ渡り、キングストンとサニアで建築業を営んで成功した。そのかわらで自由党系の新聞「ランプトン・リフォーマー」を発行している。

後年、首相になってから、彼はやっぱり石屋だ”といわれたように、政治家としての鋭敏さ、華やかさには縁がなかった。文を書けば誤字だらけ、文法はしょつちゅう間違い、演説は単調で事務的、お世辞にも魅力的といえなかった。たまたき上げた男の常として、彼は真面目に努力すれば必ず成功すると信じ、したがって落後者や不運な人には同情心を持たな

かった。しかし権勢や名誉にも、関心が薄かった。三度ほどナイト爵位の申し入れがあつたが、彼は三度とも辞退している。

頑固で、非妥協的。知性や教養というものをはほとんど信用しなかった。政治家のなかには、あまりにも明敏すぎて成功しない人がある。例えば自由党のもう一人のリーダー、エドワード・ブレイクは、知的で有能、当然党首になって然るべき人物だったが、責任を自分で引き受けるよりは、評論家であることを好んだ。マッケンジーが政権をとった五年間、ブレイクはマッケンジー内閣を出たり入ったりした。

しかしマッケンジーは、華やかな才能には欠けていたとしても、勤勉さと努力では誰にも負けなかった。彼はよく、「今どきオタワに残っている大臣は、私くらいなもんだ」とこぼしながら、昼も夜も執務室で働き続けた。彼はまた、情実と腐敗のもとであった公共事業を国民の手に取り戻そうと、自ら公共事業大臣の役を買って出た。自分の金にもつましかつたが、公金にも清廉で、「役得は当然」とする当時の風潮を苦々しく思っていた。押しかける陳情者から逃れるため、執務室に秘密の階段を取り付けさせたりした。

政治の浄化と公正化

「カナダの政界は墮落している。自由党の新風で浄化する必要がある」というのが、マッケンジーの信念であった。議員たちが企業や教会の圧力に屈しないよ

うに、議会に無記名投票制を導入し、選挙を全州同時実施にし、選挙費用の監視を厳しくして公正化を図った。

マッケンジーは、民主主義者であると同時に、ナショナリストでもあった。大陸横断鉄道建設の遅れをめぐって、カナダ総督(当時は英国人)が、ブリティッシュ・コロンビアの不満に同調して、マッケンジー政権の方針に介入しようとしたのに対して、彼は烈火の如く怒り、内政干渉だと抗議した。

マッケンジーは、自由党の理論派エドワード・ブレイクに支えられて、カナダの自治を少しでも進めようとした。そのひとつの施策が、カナダ最高裁判所の創設である。しかし最高裁をいったん創設してはみたものの、マクドナルドやイギリスに反対され、法的根拠の構築に失敗したことから、彼もこの件には固執しなかった。カナダの最高法廷は、一九四九年までロンドンの帝国枢密院司法委員会であった。

自由貿易と健全財政を固持

しかし無記名投票や最高裁、あるいは総督の権限などは、些末なことがらだったがといってよい。マッケンジーに課せられた真の課題は、新生カナダに経済的繁栄をもたらすということだったが、彼の頑固なまでの自由主義は、当の課題の実現に失敗したのだった。一八七三年に始まった世界的な不況は、カナダでも経済不振を招いたが、彼は古き良き時代の自由主義者として、自由貿易、均衡予算と